

劍 道 部

武夫原の綠草褪せて、一陣の風に落葉の哀愁を感じ、餘りにも速き時の流を恨みつゝ、大阿蘇の峰々に白雪を戴く冬を迎へて我々劍道部員は忍辱の月日に臥薪の苦業を積んで早や一才に垂んとす。人は花を追ひ蝶を求めてしげしの行樂に陶醉せんとする陽春に、我々は春の情、胡蝶の夢に背いてひたすら濟美館裡に男の子の雄叫を聞き、劍を把つて敵倒るか、我倒るか、意氣と意氣！頑張りと頑張りの戦に邁進し、道場に血の華を散らせし事幾度ぞ。これも只來るべき夏の京都の大會に於て、全國に覇を唱へんが爲の猛練習である。

部歌の最後の一節。

又繰り返す勝鬨の 高樓月に梅香り
旗の影酌む玉杯や 美酒の面に笑揺ぐ

此の一節を現實にもたらし、この大なる陶醉の下に心行くまで高校生活の感激を味ひて、四拾年來の傳統を傷げん事を恐れ目前の少なき満足を顧り見ず夕陽を浴びての

劍の生活こそ又快ならずやである。

昨夏福岡の大會に優勝戦に松山高商に惜敗しつゝいて京都にて哀れ敵の馬蹄に踏みにぢられてより我々は雪辱の念止み難く茲に復讐の一路を辿つて來た次第である。そして今我々は新鋭なる新部員約參拾名を加へて意氣新たに擧り毎日の練習に曳賦の聲を響かせてゐる。

五高劍道部即ち龍南の劍道部に對して全龍南人の理解を得んとして茲にその外廓を述べる事にする。

我部は明治廿四年四月に呱呱の聲をあげたのである。同廿七年、廿九年と矢次早に山高、七高を屠つて我部は内部より外部へと發展を初めたのである。

降つて大正二年京大主催第一回全國高專劍道大會に光輝ある優勝の榮を擔つた。ついで第三回には三高、神戸高商、七高と屠つて再度の覇業を成し遂げたのである。かくして大正七年第六回の大會に優勝戦に山口高商と激戦して三度全國に覇を唱ふ。降つて大正十五年夏七月第十四回の大會に京

城大豫、松高、二高、愛知醫と薙倒し又もや山商と覇を争ひついに四度覇權を全國に握る。

斯く榮ある歴史と傳統を有する我劍道部の後を受けて我々はこの光輝ある部史を汚す事なく益々之に光を添えんとひとすら努力を付けてゐるつもりである。

最後に此稿の一部が昨年發行された五高同窓會會報の部報の一部を轉載した如き恨みある事を御詫びする次第である。

柔道部報

委員 長 富 久

時は初夏新緑の候、自然の風物はことごとく爽快にして明朗である。龍南の天地も生氣躍動し、我々柔道部もこの期を利して將に猛練習に移らんとしてゐる。

省みるに一度紫紺の優勝旗を武夫原に飾り得た我が柔道部は來る年も來る年も傳統の牙城に迫り來る仇敵を物も見事に蹴散らしては、西部代表として堂々駒を中原に進めし事もこの幾度か、而して中國の驕兒六

高軍と華々しき戦をなしては、あたら惜しき玉と散り日も夕暮の比叡嵐に來るべき復讐を誓ひ天下をして西海に五高あるを知らしめてゐたのである。

然るに昨夏天我に味方せず名知らぬ一儒子の術数にかかり、我が頼みの陣營潰え、その昔敵軍を幽鬼の嘘啼の聲とのみ聞き流し快勝の歡喜にふける我には、多年の宿望叶ひて誇れる敵を前にして無念の涙にむせんたのである。

あはれ霸業は南柯の夢に似て戦は勝たざるべからざる故に悲嘆は深く我には其の時より「敗將は兵を語らず」の古人の言葉にならひ早くも復讐の計畫を立てひたすら斬冤の劍をみがいてきたのである。

玲瓏たる秋の夜星影を仰いで忍ぶに耐へざる恥辱を思ひ浮べ、寒風肌をつく真冬にも休暇を待ちわびる故郷の兩親の許に歸りたき氣持を努めて忘れ冬合宿をなし、かくて春三月人々は蝶よ花よと綠酒に酔ふの時断然合宿にたてこもり、まづいかゆをすすりながら只黙つて精進の道を續け思ひ出

深き春合宿を終へここに新進氣鋭の新入生部員多數を迎へ更に雪辱の意氣は燃え上つたのである。

然し我々は未だ微力である。新入生に有力選手を得たと一言へ、二年三年は數ふに足らない。じみで苦しい部から華やかな部へと移行行くのは人情の常で致し方のない事ではあるが、毎年／＼少くなりつつある柔道部に踏み止り去り行くものの後ろ姿を眺めなければならぬのは何に例へ様もない淋しみである。然し去るものは敢て追はず只熱情の士のみ例へ少くとも最後迄止り向う上の道に進むのも又男子としての本懐である。練習の苦しさに取衣のすそをかんで泣き出したくなる氣持、頭に白い綿帯に血の赤く浸んだまま黙々と練習してゐる時の氣持、苦しいには違ひないがそこに又人生の醍醐味愉快さがひそんでゐるものである。

光輝ある歴史に汚點を印し五高柔道部も今や凋落の悲運に向ひつつあると言はれても致し方はないけれども、我々のこの苦しい努力だけは認めて呉れると信じて今から一

致協力し犠牲心並びに團結力の美しき養成に努力せば内面的缺陷を掩ひ得べく夜を日に次いでの猛練習をなさば必ずや期待に沿ひ得るチームを作り得る事と思ふ。餘す所僅に二ヶ月である。梅雨頃の練習の苦しきは部員ならでは味ひ得ない事だが我々は如何に苦しくとも又如何に泣きだしたい事があつても笑つて運命に服従し人々が暑さに隋眠をむさぼる時、ひたすら無言の意氣にお互が結び合ひ胸にひめた誓へと邁進を續け今年こそは昨年の恨を晴らし「薩摩隼人」の部歌を京洛の地に高く唱へんものと固く決心してゐる次第である。

今春敗憐の心を懷き萬事を我々に託して淋しく龍南の天地を去つて行つた幾多の先輩の事を思ふ時我々はじつとしておられない氣持に襲はれ復讐の心益々切なるを覺ゆるのである。

端艇部報

彼のストローク、激浪くづれかゝるときなほ強く、